

# 一九三〇年代宮城県の綴方教育と広瀬小学校

小田嶋 悟\*

## はじめに

本論は、一九三〇年代における宮城県の綴方教育の動きを探る一環として広瀬小学校（以下広瀬小と略記）に注目し、そこでの実践や学校経営の実態について探ろうとするものである。

広瀬小は宮城県宮城郡の山村に位置する学校で、現在は仙台市青葉区にある。当校には、当時宮城県の綴方教育をリードする小学校の教師、すわち「綴方教師」とよばれる実践者が多数存在しており、綴方教育の実践において注目を浴びていた。ここでは、県内は 물론、県外からも交流を求めてやってくる実践者が数多くいた。したがって、当校の実践者の実践や、綴方教育という観点から学校経営の実態を明確にすることは、宮城県の綴方教育、ひいては国語教育や「北方教育」の実態を明確にすることにもつながってくる。

広瀬小の実践に着目した先行研究としては、中川正人「宮城県における生活綴方教育運動」（『白い国の詩編『北方の児童文集』（宮城編）東北電力株式会社、一九九二年所収）がある。中川論文においては、「衝撃を与えた広瀬小学校綴方研究会」と題し、主として研究会の実態を探ろうとするものであった。その点をふまえた本研究においては、研究会だけではなく、当校の実践者の実践や学校経営などにも注目することによって、当時の実践者が何を考え、どういう思いで活動に取り組んでいたのかという点を考察していきたい。そのためにも、実践者の証言など、できるだけ一次資料に忠実に考察を進めていくことにする。

## 第一節 『工作・国語教育』 同人の各実践

広瀬小においては、校内の同人による研究発表の場として、『工作・国語教育』と題する研究機関誌をつくっていた。そこでこの機関誌で活躍した主要実践者の実践について、見ることにする。

『工作・国語教育』を作る上で中心的な役割を果たしたのは、菅野門之助であった。代表的なものとして、「科学的指導精神を以て―」と題する論文がある。ここでは、なかなか綴方が書けない子どもを指導する場合、教師が子どもと共に嘆いてしまう「感情的指導」ではいけないことを訴える。そうした感情や嘆きから決別し、「綴方作品、子供…について冷静に観察し、分析し、考察」した「科学的指導」の必要性を強く訴えた。教育は、「愛を人格を本とする」が、「それはあくまでも、本体であって、教育を運ぶものは技術である」とする。子どもがうまく朗読をこなすことが出来ない場合には、「祖母が孫を甘やかす」ような「少女的感傷」に浸っているのではなく、発音練習や朗読の練習を数多くこ

なして、「びしびしと子供たちを鞭うたねばならない」わけである。こうした指導においては、「行きあたりばったりの教育作業」ではなく、常に計画や分析を心がける「科学的指導態度」を持たねばならないとした<sup>(1)</sup>。また、綴方には、「やせた綴方」と「肉のついた生々とした綴方」とがある。事実についてたった二、三行しか書いていないものは、まさに「骨ばかり」の綴方であり、それに「肉」をつけて詳しく書かねばならないことを子どもに主張した。生活上の出来事の中から、「一番いいと思うものをつえらんで来て、生々と」「くわしく」書くことによつて、「太った、丈夫な、子供らしい綴方」が完成するとした<sup>(2)</sup>。こうした彼の実践は、「子供の観念的な考え方を、表現を通じて正しい認識に立たせようとする」「生活認識の仕事」だと評価された<sup>(3)</sup>。この他『国語教育研究』において、文集についての意見も寄せている。彼は文集について、子どもに親切な体裁で、子ども本位に作られた文集がよい文集と考えた。ここでいう親切とは、子どもに力を与えるものであるとする。すなわち、ただ単に綴方の勉強をするだけでなく、「生活を知り、生活を味い、生活の仕方を学ぶ」ことができるように組織された文集こそ、子どもにとって親切的な文集であるということだった<sup>(4)</sup>。彼の学級文集としては、『勉強兵隊』『機関車』『草刈場』や、あるいは澤畑正一と共に『河鹿』も作り上げた。

菅野の他に、『工作・国語教育』を作り上げる上で主要な役割を担った実践者として、澤畑正一がいた。彼は、実践面においては、主として詩の指導に力を入れていた。例えば、『工作・国語教育』誌上において、「風景詩の構成指導」と題する論文を書いている。この論文によれば、彼が実際に詩の指導を行うに当たって、「題」「素材」「詩（感覚）」と項目を分けて子どもにノートに書き写させ、「素材は題意（詩的精神）を

表現するのに如何に有力に働きかけているかをさとらせ」という実践をした<sup>(5)</sup>。また学級文集としては、『上町のこどもたち』『山の村』、あるいは菅野門之助と共に『上町のこどもたち』を出した。

寺田ハツは、『小学国語読本巻二の指導の反省』という論文を書いている。これによると、まず読本の巻二を子どもに読ませた。すると、「今迄口を閉じて絶対しゃべらなかった子も」リズムカルな文につられて読み出したと言う。一方、「アシタハエンソク」の項目については、「都会の子供がおそらく学校生活最初の遠足を控えての焦慮そして、歓喜に代わる、子供心を表した生活文」であり、本校の子どもにはなじまない文だと言う。当校に通う子どもたちの場合、土地が限られているから、「ああ去年もあそこだった」と言われる始末であり、むしろ先生よりも子どもの方がどこでも知っている状況だった。したがって「遠足といっても何等感応しない」わけで、そういう意味ではかわいそうだと言う。「時計屋の店のラヂオ」にしても、子どもにはなじみがない。逆に「カマキリ」のような生活になじみのある教材の場合には、子どもはよくしゃべった<sup>(6)</sup>。このように、子どもの生活に密着した教材をいかに集めるかということに苦心して実践を進めていた。学級文集としては、『トンネル』を作り上げた。

高橋かつよは、『工作・国語教育』によせた「指導の実際」という論文によれば、読本の巻八にある「胃とからだ」において、単に文章を機械的に読み進めるだけではなく、その文章の裏面にある「社会生活の相互依存相互扶助」まで理解させなければならないと言う。すなわちここでは、「身体各機関が有機的関係に組織されてあることを擬人化して又劇化して説いてそこから世の中はすべて相持である所以を悟らせ」ようとした<sup>(7)</sup>。また一方において、以下のような出来事もあった。すなわち、

菅野門之助がある子どもの文を評して、「自分達の文は骨ばかりで肉がない。もっと詳しく表わさねばならぬ」と言った言葉を覚えていた子どもがいた。こうした「やせた綴方」について問題意識を持った子どもに對して、「子供の文を丁寧に読み、全生徒の文に親切な評をしてやる余裕がない」ことを嘆き、教師としての責任を痛感するといった出来事もあった。<sup>(8)</sup>

石森綾子は、低学年において、読本の韻文を重視した。韻文の持つリズムカルさが、「児童の感じやすい心の強い刺激となって、奥深くく入る」と言う。そして、「児童の日常のすべては自然を対象とし、それに対する驚異感激の生活である」と考え、子どもたちに詩をたくさん書かせた。一方、綴方の実践については、子どもに漫然と生活するのではなく、綴方の題材としても取り上げることができくうちに、「常に生活経験をみつめる目」を養いたいと考えていた。彼女の学級においては、子どもたちは綴方を精叙するだけで精一杯だった。そのためにも、子どもたちに、「経験のはっきりした想い出をさせると共に、題材発見の仕事」を意識させる実践を心がけていた。学級文集としては、『ろり火』がある。

こうした彼らの実践に対しては、以下のような評価があった。

(略) 共通するものは、理論が授業の奥深く光っていることであり、もう一つは、単に綴方の技術指導のみでなしに、子供の生活を問題とし、生活観培育の努力を見せていることである。これが広瀬綴方の美点である。殊に後者を深めるがよい。指導者の文を観る目も適確であるし、子供も鋭く文を見る。綴方の道は、一夜作りでは出来ない。じっくりと実践に耐えて耐えて行かねばならぬ。そして華々

しく一旗上げようと野心する人々には不向きであることを痛感させられる。然も指導者は自らの生活観をもたねばならない。深い角度の広い人生体験が(この言葉誤解されるかも知らん人生観と云おうか)内に蓄えられていねばならぬ事も。

我々は実践に臨む態度を彼等から学び取った。綴方の表現技術の修練を主体にしていたわれわれの綴方教育は今新しい夜明けを見た。生活を耕せよ。朝の鐘はそう告げている。<sup>(10)</sup>

どの実践を取り上げても、実践上子どもの生活を強く主張していることがわかる。当時にわかに話題となっていた生活を標榜する綴方が、広瀬小の中で数多くの実践者が実践を試みていたという点は注目すべきであり、この点に広瀬小の学校全体の特徴を見出すことが出来る。

## 第二節 広瀬小の学内における活動

『工作・国語教育』によれば、教育の実践と理論は常に一元的立場にあり、この立場に立ってこそ、国語教育の「工作」が約束されるという。このことを受けて、校長の宮本聯治は一号の「発刊の辞」において、「教育上総ての研究は教育という事実に即することによって価値がある」と述べている。言うなれば、「実践と理論の一元的立場」に立って国語教育について、理論付けを行おうとしていた、ということになる。

機関誌を制作する一方で、高橋かつよ、石森綾子、寺田ハツ、菅野門之助等で、懇談会を開き、食事をとりながら雑談風に、国語教育の諸問題について話し合う、という活動も行っていた。そこでは特に低学年の受け持ちの教師が多かったということで、主として低学年の綴方につい

て話し合いがもたれた。すなわち、低学年の綴方は、遊びなど普段の行動について経験した通りに細かく記述させることが出発点だとする。それは、「教師は彼らの生活を熟知していねばならぬ」ないからである。「文修練」として、教師が壇上で作業をして、子どもがそれを文にする。その際、学級内において、文法の点などについて子どもたちが互いに調べ合う。こうして文の書き方をマスターしていくものとした。その文を推敲する際、子どもが自主的に行う態度を養うと同時に、教師の指摘も大事とする。だからだと書きつづるのではなく、ある一つの事柄について詳しく書けるように仕向ける。課題については、教師が子どもと話し合ったり調べ合ったりしながら設定する。そういう意味で、「課題は一つの文話形式」であり、「あてどなき自由課題」は排除すべきだとした。こうして、「鑑賞、記述、推敲、文話」と交互に学習せしめて行かねばならぬ」とした。<sup>(13)</sup>

こうした活動の成果もあって、『山の村』『トンネル』『山』『長い道』『綴方村』『草刈り場』『あゆみ』『ろばた』『生活雑話』『雑木林』など、広瀬小からは数多くの学級文集が一度に発行された。そういう意味で広瀬小は「綴方学校の名」を自負していた。<sup>(14)</sup>

### 第三節 広瀬小の学外にまたがる活動

こうした一方で、広瀬小は、一九三四年三月二七日より、『工作・国語教育』同人主催という形で、綴方教育研究会を立ち上げた。<sup>(15)</sup> この研究会は、校内の教師だけではなく、学外の実践者にも呼びかけて、活発に議論を繰り広げていた。以下その模様の一部を引用しておく。

一記述指導のメモ・氏家芳治君（志田）君は生活環境の精密な調査から記述の様態を考えたものである。その環境の調査は科学的に精緻なものであった。時間がなくて聞けなかったのではあるが、この調査がわれわれの記述指導にどんな影響を与えるかの考察が欲しかった。それが考えられねば環境調査が単なる学問的考証に陥入る。

二書き直し指導 再論・鎌田冬二君（小泉） 書き直しを生活書き直しへ―君の所論は大きい反響呼んだ。

三綴方題材考・佐々木正君（仙台） 生活綴方題材指導の実践報告とその意図のはげしさ。

四文話のあり方・菅野門之助君（広瀬） 文話は生活開拓の仕事であるところの実践の長い道！

五低学年童詩指導の実践報告・佐藤みさえ君（荒浜）

六生活詩への意図・澤畑正一君（広瀬） この二つの試論の底に流れる強靱な生活意欲！みさえさんは静かに、澤畑君は芋虫の如くむつりと、そして燃えさかる胸の火をひそめて―

七文集制作論考・五十嵐勝治君（小牛田） 本誌の原稿は当日のを要約したるもの。<sup>(16)</sup>

こうした綴方研究会は、内外に大きな影響をもたらした。木須みちによれば、この研究会を通して、「綴方教育運動の新しい世代」を感じたという。それは、「綴方運動が、単なる綴方教育指導技術の発展を目標とするものではなく、一つの生活運動、一つの文化運動であるということ」が一つ。そしてもう一つは、「あらゆる理論が常に実践の過程に於て、構築されるという規律」であった。こうした点をふまえて、「工作

人会の綴方研究会に、僕達が、新しい世代を認めたというのは、その教授が、その発表が、ことごとくこの段階の上に立っていたから」ということであった。したがって、この研究会は、「北日本国語教育の全体的文化運動に宮城が強力な一環として位置された」とまで言い切っている。<sup>(17)</sup> こうした実績が功を奏したこともあって、「やはり綴方としては広瀬校が頭に浮」び、「澤畑正一、菅野門之助などの全国的国語人の下に寺田ハツ」等がいるという評価を得るまでに至った。<sup>(18)</sup> 実際、一九三四年に「宮城県綴方教育研究会」が結成されているが、これは、鈴木道太が若い仲間と呼びかけて結成したとされる「国語土曜会」が発展したものである、ここに広瀬小のメンバーも数多く加入していた。<sup>(20)</sup>

そうした実績が認められたということもあって、『工作・国語教育』にも、数多くの学外からの執筆者が投稿していた。例えば県内では、仙台市の佐々木正や横澤文質、柴田郡の鎌田冬二や鈴木道太などが、常連の顔となっていた。また県外からは、秋田県に加藤周四郎や、岩手県の及川公夫、永沢一明、高橋啓吾が参加していた。福島県からは木下竜二や武藤要が、山形県からは国分一太郎がいた。さらに大阪からは小川隆太郎が、鳥取県から稲村謙一が参加していた。

こうした状況下の中で広瀬小の活動が注目を浴びることになった。特に綴方研究会は、当時東北地方において「北方性」を主張する実践者が多数集うきっかけとなり、以下のような評価を得るまでにいったった。

われわれが広瀬の研究会の授業と発表から、強い感動をもって教えられたものは、綴方を生活構築の道に立たせようとする熱意である。

われわれは宮城綴方が技術的偏向をなしている事を痛感し、広瀬の研究誌工作国語教育も「綴方教育に必須なるもの」を特集して警告を与

えている。今やわれわれは新しい夜明けを知る。而もまたこの研究会に於ける夜明けには北方意欲への進軍がまき起された。鈴木道太が司会した座談会に於て、福島の木下龍二、山形の国分一太郎、秋田の佐々木昂、加藤周四郎の諸兄が、曇天の下の健康な北方意欲をその談話から放出し、人々は強風のような激動に打ちのめされた。軍旗作文の感想、の語り手は昂奮していますので私の話はぬきにします。と言って壇を下りた程であった。<sup>(21)</sup>

この当時の広瀬小の綴方研究会が、「北日本国語教育連盟結成準備会」の「会合の機会を提供した」とする説もある。<sup>(22)</sup> またその一方では、福島の福島県綴方研究会において、「プチブル的で北方性には懐疑的であった」とする証言もある。<sup>(23)</sup> 実際に広瀬小との関わりがどの程度あったかというところについては、本研究の段階ではあくまでも推測の域を免れない。しかし、少なくとも、広瀬小の中では学外まで関係を広め、実践上の輪を広めていこうという認識を持っていた。

#### 第四節 広瀬小の学校経営について

『工作・国語教育』にしても、綴方教育研究会にしても、広瀬小の中でそれらの活動を可能たらしめたものは何かと考えた場合、そこには、広瀬小の学校経営における特色を見出すことが出来る。広瀬小に関する以下の引用文を見てみたい。

(略) 広瀬の強味は、その実践の密図にある。

確かな文学力を持つ上に、実践で鍛えた強力な理論がある。その上

におびただしい書籍を消化しているのである。

今の宮城県で、厚生閣でもいい東苑書房でもいい、とにかく国語教育に関する書籍を、もっとも大量に消化する学校は、仙南では村田、仙北では広瀬である。

だからその読方綴方の授業を見ると、あらわれている指導実践の裏に、山のような理論がかくされているのである。そうでなくてはあんなに行届いた、深みのある感情が出て来ないのである。

校長伊藤氏は、恐らくそれらの指導に対して一言の助言もなされぬであろう。氏は只野の一束の草の花をむしっては、教卓のつぼに投込む位が関の山である。

此処では、野と人の間に、人と人の間に、無為にして化す風懐が、すでに深々と培れているのである。

でない限りは、一張羅を謄写版の墨だらけにしたり、「工作・国語教育」などという毎月の研究誌は、<sup>マ</sup>とうてい生れっこない筈である。<sup>(24)</sup>

ここから読みとれることは、まず学校経営の問題として、広瀬小においては、教育活動に対する校長の理解が得られていたということである。『工作・国語教育』を発行したり、あるいはその同人のグループを結成する上で、中心的な役割を果たしたのは菅野であった。したがってまず菅野自身が校長から信頼を得ることが出来なければ、こうした活動を起こすことは不可能である。特に宮本聯治の後任として広瀬小の校長職に就いた伊藤啓からの信頼があったことが大きかった。菅野自身、「新任の伊藤校長先生から、工作国語の仕事について、激励をいただいた。理解をいただいて、今年は仕事の上で、大きい進展を約束するだろうことを

喜ぶ。」<sup>(25)</sup>と言っていることからそれが読みとれる。当時伊藤は、「北方の伯父」と呼ばれ、親しみをもたれていたという点も注目すべき事である。<sup>(26)</sup>さらに、菅野の以下の文に注目する。

工・国を作る計画は、この年（一九三四年：注記は筆者）の一月に考えてみた。それを私は二月の放課後、暮れかけた職員室で先生方にした。

校長宮本先生は、「しっかりしていない」私の性質を知って居られるだけにとめて下すった。きっと三号ぐらいでこの男はやめるだろう。そして恥をかくだろう、と御考えになったのかも知れない。私には先生の暖い気持が察せられたので、ムリに押し通してしまった。

三号で行きづまる。なあにあいつのやる仕事だ、三号がせいぜいだ。と云う声を聞いた。澤畑先生が協力してくれなかったら或いはその通りだったかも知れない。澤畑先生は私を励まし、私をベン護してくれ、一しょに<sup>●●</sup>（二文字判読不明：注記は筆者）仕事をしてくれた。力強い限りであった。ある人は「月給もロクスッポ払われないのによけいな仕事だ。そんなこととして増俸すると思うか」と直接に悪口してくれた。「えらくなるためではないんですよ」と言ったが、その人は聞いてはいなかった。もし自分だけがエラくなるなら、強くもない体を酷使して原紙きりなどするか。おれはそのひまに本でもよむ。（略）

「門はハムレットを清算して実践に出発した」と道太さんは言うてくれたし、「迫力があっていい」と横澤さんは激励してくれた。二号を出すと正さんが「表紙を作ってやる」と言うてくれた。編集

のこと、原稿のこと、その他こまかしい仕事の一切を私はこの人々に教えられてきた。自分を知って貰えるよろこびを私はその時しみじみ感じた。<sup>(27)</sup>

この菅野の文によれば、『工作・国語教育』の制作を企てた際、当初は、校長の宮本にその案を却下されたわけである。しかし前述した通り、校長の了解が得られない限り、そのような研究機関誌を学校で発行することは不可能である。しかし、最終的には校長の許可がおりて、その発行も可能となった。それはなぜか。その答えを出す前にもう一度、彼の以下の投稿文を見てみたい。

表裏のない生活、生まじめな生活、そうした講談社的イデオロギーが私の、求めるものではありません。私の良心は、そこには止まっていないようであります。

私達は校長の従属物ではありませんし、学校がギルドでない限り、校長は私達の親分でもありません。私達は学校を一つの協同体とみたいのであります。私達の協議を校長が統率する。校長は一つの団体の、ひところ流行りました言葉で言えば、オルグでいて貰いたいのです。私達は、私達の仕事を遂行し、私達の学校を経営し、お互いの協議と反省によって、よい学校社会が生活出来ることを望みますのです。

私は校長のために仕事しているのではなく、まして県のお役人のために仕事しているのではなく、私達の仕事の対象は子供であるべきだと考えます。私達には子供に尽してやっていると云う満足感や、子供をギマンしないと云う良心や、子供に済まないと云う反省が好も

しいものと思います。

校長に圧迫感を感じ、又校長が圧迫的態度に出て来る時には、吾々の集团的営みに何らかの無理がある時であり、私達の仕事本来の目的に沿って行われない時であります。

私達は、「表裏ある生活」から逃れねばなりません。それには一つの信念が要します。生活信仰です。私達が生活信仰の対象とすべきものは子供であり、私達が協同社会を構成する一員であると感じる時に、私達の仕事は真に表裏のない良心的なものになると思うのであります。<sup>(28)</sup>

彼のこの主張によれば、まさに校長も「協同社会を構成する一員」であった。あくまでも集団の一員であり、オルグである校長の意見や考え方は、絶対ではない。したがってたとえ校長が『工作・国語教育』案を却下したとしても、その周囲で『工作・国語教育』案を支持する声が盛んにあがれば、校長も認めざるを得ない。そうした雰囲気を作り出した人々こそ、まさに菅野をサポートした各実践者であった。いわく先ほどの引用文にでてきた澤畑であり、道太であり、横澤であり、正であった。こうした多くの支持者を得ることによって、宮本校長も動かざるを得なかったのである。実は校長の職を宮本聯治から引き継いだ伊藤啓も、まさに彼の支持者であった。赴任当初から『工作・国語教育』の制作や仕事に対して理解を示していた。<sup>(29)</sup> また自らもその機関誌に「冷害地風景」と題して詩を載せるなど、機関誌の発展に積極的な姿勢を示した。<sup>(30)</sup>「伊藤啓校長が彼等の力を認めて、充分力を発揮させている」という評価も得るほどであり、彼が支持者であった点は重要である。菅野による「職場集団づくり」の実践が功を奏したという見方もあるが、それよりは、

彼を支持する実践者が多数いたという事実の方が先にくる。広瀬小には、そうした恵まれた環境が整っていたということである。

さらに彼の支持者は、実践者だけではなかった。最後に次の引用文を見てみたい。

—おい、頼んますぞ、頼んますぞ、好い先生どもでナア と、小使のおんつあんが僕の手を握りしめるのである。門之助君も澤畑君も、彼おんつあん氏の息子と同じだと云うのである。そして僕が彼らのやぐざな兄貴と同じであって見れば、彼らは僕に頼まるべき宿命を持っていると、使丁氏は云うのである。

(略)

世の多くの学校に於ては、使丁氏は教員より一級下である。使丁氏には多くは初段の黒帯を、貰い得ぬのみか、対抗試合などは、さらさら出ることが出来ないのである。

而しながら、此所では、使丁氏は寧ろ主将であるのである。<sup>(33)</sup>

広瀬の「使丁」は、単なる雑用をこなす小遣いではなく、学校全体を和やかにさせる役割を担っていた。たとえば、佐藤みさえが広瀬小を訪れた際、「使丁」は「ハマの詩のみさ公」であることを知って感激し、早朝にわざわざ広瀬の名勝を案内しようとしたという。また佐々木昂が訪れた時には、使丁と気軽に食事をとり、彼の心を和ませた。それに感動した彼は、「教員室が和やかでなくてどうして温い教室が出来るか」と、広瀬の教員室を懐かしみながら帰っていったという。<sup>(34)</sup> こうした理解ある学校職員が広瀬小にいたということは注目し値するわけであり、まさに教職員一体となつての「温い」学校経営が広瀬小で成り立っていた

ということが言えるわけである。

おわりに

宮城県の国語教育を探る一環として本研究を始めたわけだが、まだ調査も資料蒐集も始まったばかりであり、その意味で、本研究は序論の段階である。広瀬小内にもまだ注目すべき実践者が数多く残っており、また「国語土曜会」の実態についても明らかにされていない。さらには、彼らの戦中・戦後の実践についても明確にする作業が必要である。

本研究においては、実践者の証言を重視するという意味で、一次資料の引用に頼る部分が多かった。そのため、さらに深い分析をなす必要性もあり、加えて短時日のまとめにより、拙稿の不明さを一層増したものと思われる。そうした点についてはすべてお詫びした上で、今後の課題とさせて頂きたい。

(二〇〇二年一月二九日 未完)

注

- (1) 菅野門之助「科学的指導精神を以て」(宮城県広瀬小学校『工作・国語教育』第一号、一九三四年所収、頁なし)
- (2) 菅野門之助「緩方のべんきょう」『かじか』(河鹿)『低学年文集 第二集』一九三四年一月所収
- (3) 谷村十郎「新しき時代への夜明け」(国語教育研究会編集発行『国語教育研究』第四卷第一号、一九三五年所収、一五頁)
- (4) 「文集を語る」(『国語教育研究』第四卷第一号(前掲)所収、四〇頁)
- (5) 澤畑正一「風景詩の構成指導」(『工作・国語教育』第一号(前掲)所収、頁なし)
- (6) 寺田ハツ「小学国語読本巻二の指導の反省」(『工作・国語教育』第一号(前掲)所収、頁なし)
- (7) 高橋かつよ「指導の実際」(『工作・国語教育』(前掲)第二号、一九三四年所収、



- 頁なし)
- (8) 高橋かつよ「小さき反省」(『工作・国語教育』第一号(前掲) 所収、頁なし)
- (9) 「指導者の言葉」(『工作・国語教育』(前掲) 第一二号、一九三四年所収、二二頁)
- (10) 谷村「新しき時代への夜明け」(前掲) 一六〇一七頁
- (11) 『工作・国語教育』第一号(前掲、頁なし)
- (12) 宮本聯治「発刊の辞」(『工作・国語教育』第一号(前掲) 所収、頁なし)
- (13) 一九三四年二月一七日午後三時、校内の尋三の教室において開いた。(M・O・N・「工作人・懇談会のことども」(『工作・国語教育』第二号(前掲) 所収、頁なし)
- (14) 「広瀬の文集を語る」(『工作・国語教育』(前掲) 第一〇号、一九三四年所収、一七二四頁)
- (15) 菅野門之助「編集独白」(『工作・国語教育』(前掲) 第九号、一九三四年所収、五一頁)
- (16) 谷村「新しき時代への夜明け」(前掲) 一七〇一八頁
- (17) 木須みち「新しい発足―工作人綴方研究会の歴史的意義―」(『工作・国語教育』第一〇号(前掲) 所収、四三〇四五頁)
- (18) OS記「国語だより」(『国語教育研究』(前掲) 第五卷第一号、一九三六年所収、五六頁)
- (19) M・O・N・「工作人・懇談会のことども」(前掲)
- (20) 宮城県教育委員会編集『宮城県教育百年史』(第二卷 大正・昭和前期編) ぎょうせい、一九七七年、八九〇〇八九一頁
- (21) 谷村「新しき時代への夜明け」(前掲) 一八頁
- (22) 中川正人「衝撃を与えた広瀬小学校綴方研究会」(白い国の詩編『北方の児童文集』(宮城編) 東北電力株式会社、一九九二年所収、六三六頁)
- (23) 福島県教育委員会編集発行『福島県教育史』第二卷、一九七三年、七〇二頁
- (24) 丘幾之助「広瀬綴方学校参観記」(『国語教育研究』(前掲) 第三卷第三号、一九三四年所収、四五頁)
- (25) 菅野門之助「編輯後記」(『工作・国語教育』(前掲) 第四号、一九三四年所収、頁なし)
- (26) 谷村「新しき時代への夜明け」(前掲) 一四頁
- (27) 菅野「編集独白」(前掲) 五〇〇五一頁
- (28) 菅野門之助「校長と生活信仰」(『工作・国語教育』(前掲) 第一二号、一九三五年所収、七五〇七六頁)
- (29) 菅野「編集後記」(前掲)
- (30) 伊藤啓「冷害地風景」(『工作・国語教育』第一〇号(前掲) 所収、四六頁)
- (31) OS記「国語だより」(前掲) 五六頁
- (32) 中川「衝撃を与えた広瀬小学校綴方研究会」(前掲) 六三五頁
- (33) 丘「広瀬綴方学校参観記」(前掲) 四六頁
- (34) 道太「北方の伯父―伊藤校長を語る―」(『工作・国語教育』第一〇号(前掲) 所収、頁なし)